

派遣者番号	R3K09	氏名	佐藤 由佳
研究主題 —副主題—	校内授業研究の在り方に対する教師の受け止め —「日常性」・「非日常性」に着目して—		
派遣先	東京学芸大学 教職大学院	担当教官	大村 龍太郎
所属	国分寺市立第四小学校	所属長	出町 桜一郎

キーワード：校内研究 日常性 研究組織 研究主任 同僚性

1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

「学び続ける教師」という言葉が注目されて久しい。教員の多忙が社会で問題視される中、日常的な学びの場としての校内授業研究は、ますますその重要性を増していると言える。

鹿毛（2017）は、日本の校内授業研究において、「業務化・形骸化・非日常化」が起きていると指摘した。業務化・形骸化は、多忙から生じているものと推測されるが、非日常化については、多忙化を助長する働きがあるものとして認識される。校内研究に対するネガティブなイメージとして、授業の公開・準備の非日常性に対する否定的な認識や、自由な探究が制限されている実態、成果の不確かさに対する不満があることが前田・浅田（2020）の研究によって示唆されている。また、神山（1995）は、「研修の日常性によって多忙を理由として研修を避けるという意識が抑制され、他方で研修場面の非日常性によって、研修場面での規範的・理想的な教師像を志向することが正当化されるという関係を見出すことができる」と述べている。教員は、多忙の中で質の高い学びを実現する必要性と向き合い、日常性と非日常性の間で揺れながら、校内授業研究を行っている。

多忙が深刻化する現在の学校現場において校内授業研究のシステムを設計する際には、教員の感情は無視できないものである。そこで本研究では、教員の校内授業研究の在り方についての捉えを、日常性・非日常性という観点から明らかにするとともに、校内授業研究での学びを日常の授業に生かすための示唆を得ることを目的とする。

2 研究の方法

本研究では、日常性を強く意識した校内研究を組織的に行っている小学校（A及びB小学校）と一般的な校内研究を行っている小学校、両方を経験した教員10名に半構造化インタビューを行い、それぞれの校内研究の在り方に対する受け止めについて聞き取った。録音データを基に逐語録を作成し、M-GTA（木下、2003）の手法を参考に分析を行った。

日常性を重視した校内研究を行っている学校として選定したA小学校は校内研究テーマに対して全員が個人の研究テーマを設定する個人課題型、B小学校は教員個々が探究したいテーマを持ち寄りグループ編成するプロジェクト型の校内研究を行っている。

3 研究の結果

分析を行った結果、34個の概念、9つのカテゴリーが生成された。これらの概念の全体的な関連について、結果図（図1）にまとめ、結果図におけるカテゴリー間の関係性をストーリーラインにまとめた。ここでは、日常性・非日常性の中で起きている教師の葛藤に着目し、その概要を述べる。

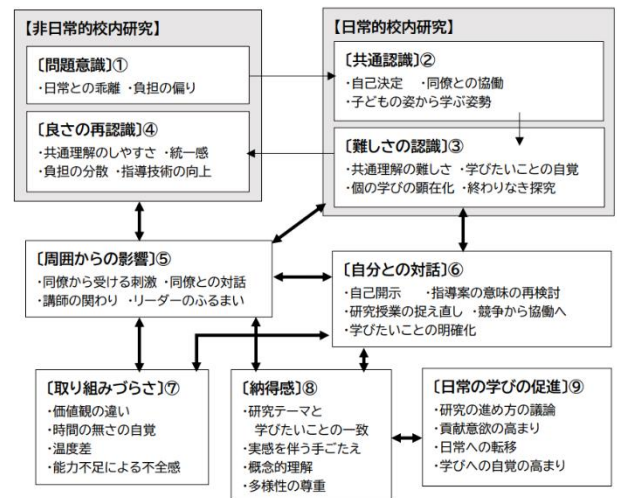


図1 分析結果

(1) 学びたいことの自覚

非日常性の強い校内研究では、研究テーマが一方向的に決められることや自分の興味・関心と合わないことへの違和感が語られた。しかし、日常性を重視する校内研究において、個々が「学びたいこと」を問われた際、戸惑いや混乱が生じていた。その後、1年目は難しさを感じながら、手探りで取り組む教員も多いが、2年目以降には自分なりの課題や目標を見付けており、それらが教員としての学びの自覚やキャリアを考えることにもつながっていた。

(2) 日常への転移

校内研究で扱った内容に関して、日常への転移

が起きる場合と起きない場合が存在した。教員の認識として、校内研究における成果、とりわけ研究発表など公に示すものに関しては、社会的な説明責任を果たすものという意味や重要性を理解しているが、同時に、実態に合わない成果を作り上げているというような違和感ももっていた。ここでは、教師は見取った際の自分の感覚や同僚との率直な意見交換から、自分の実践を判断しようとしていた。また、校内研究において、スキルの修得のみならず、教授することで概念的理解が促され、研究授業での学びが日常への転移につながっていた。

(3) 研究を支える同僚性

日常性を重視する校内研究では、個の学びの顕在化が起きやすい。日々の業務に追われ、学びに向かえない状況に陥っている教員が存在することについての懸念が多く、教員から語られた。それらの個の状態も含めて、多様性を尊重する姿勢として受容し、納得することで、校内研究組織を安定的に成り立たせようとする価値観が生じていた。また、専科教員や特別支援教育担当教員の立場からのもの見方を示すなど、専門性を生かした貢献意欲の高まりが見られた。これらは、校内研究の領域を超えた日常的同僚性の高まりへとつながっていた。

4 研究の考察

校内授業研究の非日常的な側面については、先行研究で指摘されているとおりの問題意識をもつ教員が多かったが、日常性を重視する校内授業研究に取り組んだ教員からは、校内研究における非日常性にも良さがあることが示唆された。

また、日常性を重視する校内研究の中にも研究授業や協議会などの非日常性は存在し、非日常性の強い校内研究の中にも日常性は存在する。日常性・非日常性を二つの対立する軸として捉えるのではなく、本研究を通して得られた両者に共通する軸を基にして、校内授業研究での学びを日常の授業に生かすための手だてについて考察する。

(1) 研究テーマを納得するプロセスの重視

研究テーマと自分の学びたいことが一致しないため、研究にコミットできないという考え方があ一方、自分で決めることになるとう困惑するという実態が明らかになった。これは、研究テーマが一方的に与えられるという状況に対する心理的負担感が影響しているものと考えられる。しかし、実際は多くの教員が自身の学びたいことを強く認識しているわけではない。そのことを踏まえると、研究テーマの設定の仕方を重視するのではなく、研究テーマを納得するプロセスを重視する

ことが現実的であると考えられる。

(2) 教員個人の学びたいことの自覚

学びたいことを問われる環境に身を置き続けることで、数年後には、自分はその年に何を学び、何を学べなかったのか考えたり、教員としてどのように力量形成していきたいのかビジョンをもったりするようになっていた。自分の学びたいことは何かということを考え続けたり、同僚との交流を通して自己を見つめ直したりする機会が日常的に授業改善を行う「学び続ける教師」へとつながる可能性がある。

(3) 学びを実感できる状況を生み出す

教師は、校内研究の表向きの成果と自分の納得する実感を持った成果を分けて捉えていることが分かった。学びを実感できる状況を生み出す手段としては、①研究授業を失敗可能なチャレンジの場とすること、②対話による省察の2点が考えられる。これらの実現には、管理職や研究主任の働き掛けや場作り、講師の関わりが不可欠である。失敗可能なチャレンジを肯定する働き掛けや適切な頻度での対話による省察の場作りにより、研究授業での学びが日常に転移しやすくなる。

(4) 学校の状況をセルフモニタリングする

校内授業研究を進めるに当たっては、組織の在り方についても教師の納得感が鍵となる。

異動によりメンバーが変わる年度当初には、管理職を含めた教員一人一人がどのように校内研究を行っていきたいか、どのようなモチベーションをもっているのかなどを共有する場を作ること、互いの価値観を理解し合い、心理的な負担が少ない状態での組織作りが可能となると考える。その中で日常性・非日常性のバランスを意識しながら、研究授業の回数や研究協議会の実施方法、学習指導案の位置付けなどを考えて計画すると、個々の校内研究への参画意識が高まると考えられる。

5 今後の展望

本研究により、教師が校内授業研究における日常性・非日常性をどのように捉えているかの全体像をつかむことができた。そして、校内授業研究での学びを日常の授業に生かすための手だてについて提案を行うことができた。

校内授業研究の在り方は、学校により様々であり、望ましい取り組み方もその学校に合わせて考えていく必要がある。それぞれの学校に所属する教員が納得しながら、校内研究に充てられた時間を有効に活用し、日常に生かせる学びの場として機能するよう本研究の成果を校内研究の推進者に伝えていく。